

マルチサイトシステム

有限会社コマクサファーム(養豚経営・岩手県八幡平市)

地域の概要

有限会社コマクサファームが位置する岩手県八幡平市は、県内でも有数の温泉地で、冬は寒く最低気温は -20°C になることもあるが、スキー場などの冬季観光産業が盛んで、夏は過ごしやすい気候である。また、岩手山の麓にあり、民家も少ないため、畜産立地には非常に適している。八幡平市としては耕種農業が盛んで、畜産においては大型ブロイラー農場があり、それ以外は小規模な酪農家が多い。

経営の概要

コマクサファームは現会長の遠藤啓介さんが昭和45年に母豚10頭からの養豚業に取り組



遠藤勝哉代表取締役社長

み、その後、45年間で母豚1600頭まで規模拡大を図った。平成23年に啓介会長の長男である勝哉さんが社長に就任。勝哉さんは就農前

(表1) 経営の推移

年次	飼養頭(羽)数	経営・活動の内容
昭和45年	母豚10頭	旧西根町大更松川地区にて養豚業を創業
昭和55年	母豚800頭	創業地松川農場経営規模が母豚40頭へ 新立地平笠へ母豚400頭の一貫農場建設、母豚規模800頭へ
昭和60年	母豚850頭	新立地、玉山農場(一貫)新設 旧松川農場は閉鎖し、平笠(母豚450頭)、玉山(母豚400頭)の2農場で経営
平成4年	母豚1500頭	玉山(母豚1000頭)、平笠(母豚500頭)の同立地に豚舎を増設し母豚規模1500頭へ
平成18年	年間出荷頭数 16.6頭/母豚→20.3頭/母豚へ	生産システム変更し2サイトへ
平成21年	年間出荷頭数 20.3頭/母豚→24.0頭/母豚へ	生産システム変更し3サイトへ
平成26年	年間出荷頭数 24.0頭/母豚→26.5頭/母豚へ	生産システム変更し肥育農場を分散



離乳農場

に米国に4年半留学していたほか、IT技術者勤務の経験を生かし、米国の衛生管理手法を積極的に取り入れている。

経営管理・生産技術の特色

【経営管理について】

農場成績（分娩率、離乳頭数、出荷体重）を給与に反映させる「成功報酬制」を取り入れ、基本給にプラスして「目標値」に達した部分を報酬として支払っている。目標値の設定は農場場と従業員の話し合いによって決定され、これによって従業員のモチベーション向上を図っている。

さらに農場成績はベンチマークを用いて同業者と切磋琢磨（せっさたくま）することで成果を上げている。また、それに伴う経理と密着した数字の管理も行っている。

【生産技術について】

アメリカの生産方式に習い、農場のマルチサイト化（豚の成長過程に適合した飼養管理が可能となるようにステージごとに豚舎を分散させる方法）を導入している。現在は繁殖農場、離乳農場、肥育農場を分散させる3サイトに取り組み、衛生管理を徹底させることで疾病リスクを軽減させている。現在はPRRS, APP, MPSの清浄化に成功している。

また、繁殖、離乳、肥育と新たに設備する



第1肥育農場

中で、分散するごとに飛躍的に農場成績も向上し、平成26年度の母豚1頭当たり産子数は33.1頭、離乳頭数27.9頭、年間出荷頭数26.5頭、年間分娩回数2.50回と繁殖成績も向上し、飼料要求率も改善するなど、経営成果に表れている。

なお、母豚はデンマークからダンブレッドを直接買い付けている。

耕畜連携の活動

地元耕種農家に良質な豚ふん堆肥を供給し、耕畜連携の活動を農場の立上げ当初から行っている。また、地域の飼料用米生産農家と契約し、全量（平成26年度856t、平成27年度1800t）を買い上げて肥育豚に給与している。これにより、地元の飼料用米増産に大きく貢献している。

地域貢献、生活の視点

【ふん尿処理と循環農業】

堆肥はコンポストにて完熟処理後、耕種農家へ無償で提供し、汚水は活性汚泥方浄化槽にて規定基準値まで浄化し、河川に放流（認可取得済み）している。また、地域住民とのコミュニケーションも積極的に図り、養豚業への理解醸成に努めており、近隣からの家畜排せつ物、臭気に関する苦情はない。

【ブランド豚「杜仲茶ポーク」の展開】

肥育豚は70%が岩手畜産流通センター、20%が山形県の食肉センター、残り10%が仙台食肉市場へ出荷される。このうち一部は自家農園で生産される杜仲茶（とちゅうちゃ）を粉状に加工し、肥育豚に給与した「杜仲茶ポーク」のブランドで地産地消費材として地元観光産業にも深く浸透している。

【地域雇用】

現在、38人の従業員を雇用しているが、地域の活性化を図るため、その80%を地元八幡平市から雇用している。

男女共同参画社会への取り組み

養豚は男女関係なく従事できる産業であるが、産業としてのイメージが悪いのが現状である。

農場に対する防疫の観点からも外部からの訪問者を制限しがちな産業だが、コマクサファームにおいては「ルールを守れば防疫できる」という観点から外部からの農場見学者を積極的に受け入れている。

外部からの来客を受け入れることは農場の環境美化にもつながり、職員の衛生意識を維持できるとともに、地域の理解や雇用の創出



スノコ式の肥育豚舎

（表2）経営実績（平成26年）

経営の概要	労働力員数 (畜産・2000hr換算)		家族構成員	1.7人
			従業員	49.1人
	種雌豚平均飼養頭数			1,567.0頭
	肥育豚平均飼養頭数			頭
	年間子豚出荷頭数			0頭
収益性	年間肉豚出荷頭数			41,532頭
	所得率（構成員）			12.8%
生産性	種雌豚1頭当たり生産費用			760,418円
	繁殖	種雌豚1頭当たり年間平均分娩回数		2.50回
		種雌豚1頭当たり分娩子豚頭数		33.1頭
		種雌豚1頭当たり子豚離乳頭数		27.9頭
	肥育	種雌豚1頭当たり年間肉豚出荷頭数		26.5頭
		肥育豚事故率（離乳時からの事故率）		4.8%
		肥育開始時	日齢	85日
			体重	40kg
		肉豚出荷時	日齢	165日
			体重	116kg
		平均肥育日数		80日
		出荷肉豚1頭1日当たり増体重		0.950kg
		トータル飼料要求率		3.52
		肥育豚飼料要求率		
		枝肉重量		75.3kg
販売価格		肉豚1頭当たり平均価格	40,754円	
	枝肉1kg当たり平均価格	541.2円		
枝肉規格「上」以上適合率		48.9%		

にもつながると考えて取り組んでいる。



枝肉共進会で名誉賞を受賞

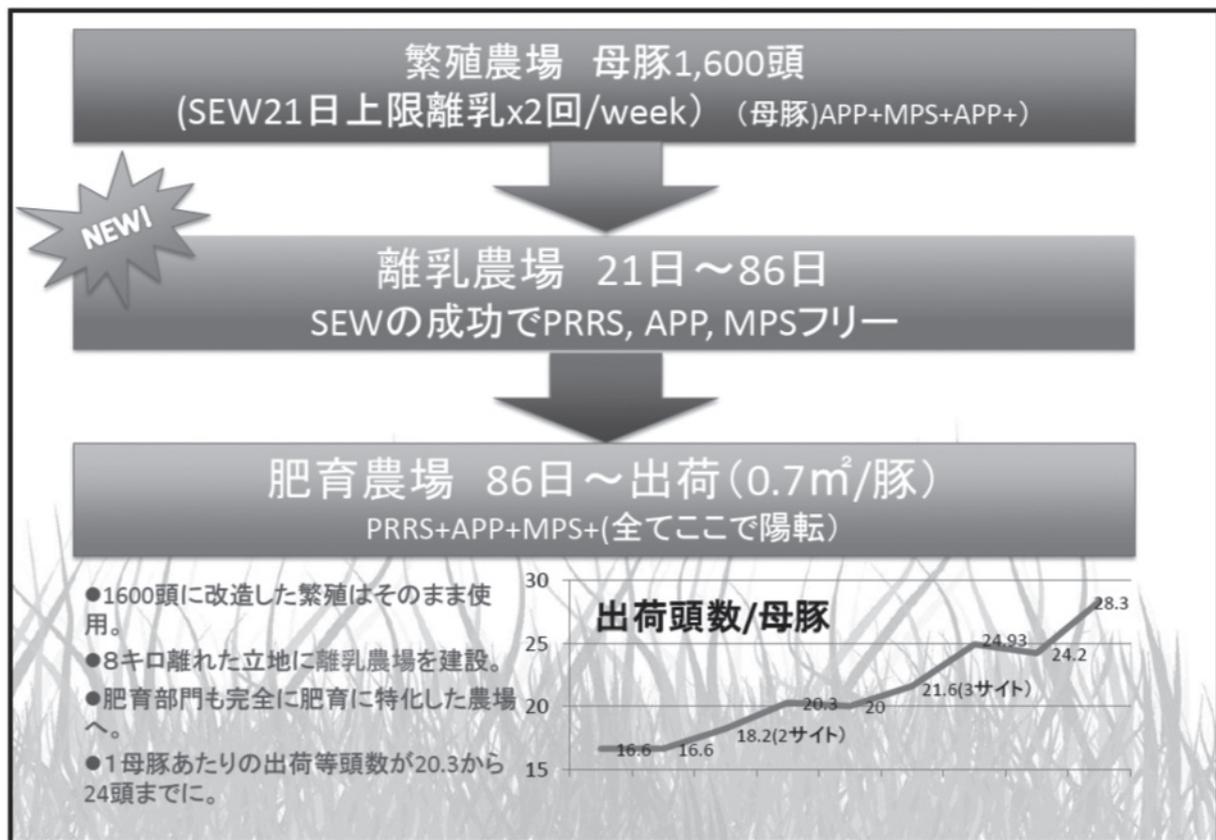


第2肥育豚舎



清潔に保たれた豚舎内部

(図3) 平成25年までのビッグフロー(3サイト化)



将来の方向性

【次世代への継承(経営の継続性)】

増頭計画に基づき、2016年には母豚3200頭規模の繁殖豚舎の建設を予定している。また、生産システムを単純化する事により、スタッフの教育環境の改善や、誰でも養豚に携われ

るような間口の広い経営を目指している。

【今後の経営計画】

現状のハードウェアでは生産性は種豚の能力以外は頭打ちの状態にあり、これからも飛躍する種豚の能力に合わせ新たな設備投資が必要になるが、増頭と合わせて取り組んでいきたいと考えている。